

佐世保で

「働く」×「暮らす」



製造 九州テン 永尾 大河 さん

医療 佐世保市総合医療センター 辻 ひとみ さん

教育 九州文化学園幼稚園 末富 春菜 さん

金融 九州ひぜん信用金庫 磯本 梨紗 さん

※取材時は感染症対策を徹底した上で写真撮影の時だけマスクを外しています。

新型コロナウイルスの影響によって私たちの生活が大きく変わりつつある今、地方での働き方や暮らし方に注目が集まっています。今回の特集では、市内の高校や専門学校などを卒業し、就職先として地元の企業を選んだ4人の20代の皆さんに、地元企業を選んだ理由や佐世保での暮らしなどについて話を伺いました。就職先としての佐世保には、どんな魅力があったのでしょうか。若い皆さんの視点でお知らせします。

佐世保での暮らしはどうですか？

永尾 佐世保はとても住みやすくて大好きです。気候が穏やかで、海や山に囲まれて自然も豊か、街中も程よくにぎわって暮らしやすいですね。

磯本 ほんと、佐世保は住みやすいまちですよ。私は子どもの頃からずっと住んでいるので、何をしても安心して生活できます。

末富 水族館や動植物園、ハウステンボスやパーベキュー施設など、親子で楽しめる場所もたくさんありますよ。

辻 そうですね。私は展海峰や神崎鼻公園などで、美しい自然を楽しんでいます。
磯本 社会人になって車を持つようになり、学生時代よりもいろんな場所に行くようになりました。

末富 それに昔は気付かなかったことにも興味を持つようになり、新しい発見もあります。私は幼稚園に勤めているので、子どもや保護者の視点でいろんなものを意識するようになりました。

磯本 私は慣れ親しんだまちで働きたいと考えていたので、最初から佐世保で就職先を探しました。

末富 私も同じです。進学する際、県外の学校説明会に行きましたが、やっぱり佐世保がいいと思いました。
永尾 私もです。地元にいるとなんかホッとするんですよ。

磯本 仲の良い友達が地元にいることも大きいですね。最近はコロナ禍で他県との往来が難しくなり、改めて地元の友達との存在を大きく感じています。

末富 県外で就職した友達からも「佐世保に帰りたい」という話をよく聞きます。やっぱり住み慣れたまちが一番過ごしやすいのかなって思いますね。

辻 私は家族の存在も大きいです。仕事から疲れて帰ってきた時に家族がいるとすごく気持ちが和らぎます。県外での生活も魅力的ですが、今振り返ると改めて佐世保で就職して良かったと思いますね。

就職活動を振り返ってみて、当時はどんな様子でしたか？

磯本 高校2年生の時、どんな仕事をしたかを考え始めました。最初は行きたい会社が決まらず焦りましたが、先輩方の就職レポートをたくさん読んでいろいろ考えましたね。

末富 私は中学生の頃から保育所か幼稚園で働きたいと思っていましたが、いざ就

永尾 あとは食べ物新鮮でおいしい。特に私は魚が大好きで、休日にはよく市場に行き、自分で魚を買ってさばいています。

磯本 すごいですね。佐世保といえば佐世保パーガーもありますし、最近ではおしゃれなカフェも増えてきて、街中もにぎわっていますよ。

辻 他にも佐世保は市内にたくさん病院があり、医療も充実しているので、年齢を重ねても安心して過ごせます。

永尾 こうして考えてみると、佐世保は暮らしに必要なものがコンパクトにまとまっているからこそ、暮らしやすいのかもしれませんね。

県外での就職を考えたことはありましたか？

辻 都会への憧れはありましたね。一時は県外に出ることを考えましたが、希望する具体的な病院もなく、地元でも最先端の医療に携わることが分かったので、佐世保で働くことにしました。

職活動となると、どの施設(会社)に行こうか悩みましたね。

辻 分かります。私もいろんな病院の求人を見て悩みました。

永尾 皆さんとても悩まれていたんですね。私は高校時代に今勤めている会社に工場見学で訪れ、「この会社で働きたい」と決めていました。

末富 すごいですね。そういえば私も今勤めている幼稚園にインターンシップをしたことがきっかけかな。

辻 私も今勤めている病院に実習で訪れた時、指導してくださった先輩がとても素敵な人で、同じ職場で働きたいと思うようになりました。

末富 実際の現場で経験を積むことで、その業界や会社を深く理解できるので、インターンシップや企業説明会などには積極的に参加した方がいいですね。

磯本 他には学校の先生にもよく相談していました。面接の練習に何度も付き合っていたので、お世話になりましたね。

永尾 私も当時、敬語の話し方など社会人としてのマナーを教わり、苦労しましたが、いい勉強になりました。

末富 これから就職を迎える皆さんは期待と不安があると思いますが、いろんな可能性が広がっていくと思うので、自分の気持ちや考えを大事にして就職を考えてほしいですね。

(取材日 7月4日)

大好きな地元で 大好きな子どもの成長を見守りたい

認定こども園 九州文化学園幼稚園

幼稚園教諭 末富 春菜 さん

佐世保商業高校を卒業後、長崎短期大学(保育学科・保育専攻/専攻科・保育専攻)に進学。現在は、認定こども園九州文化学園幼稚園に勤務し、日々子どもたちの成長を感じ、楽しみながら毎日過ごしています。

教える楽しさを仕事に

「子どもたちの成長が私の原動力です」と話すのは、九州文化学園幼稚園に勤める末富さん。

4歳からバトントワリングを始め、中学時代、後輩の子どもたちに教えることが楽しかったことや、子どもたちが元気に成長する姿に喜びを感じたことがあり、次第に将来は子どもに携わる仕事をしたいと考えるようになりました。

夢の実現に向けて長崎短期大学に進学し、保育学科と専攻科で高い専門知識を学んだ末富さんは、「県外に出るよりも佐世保で安心した暮らしをしながら仕事をしたい」と考え、生まれ育った地元での就職を目指すことにしました。

元々は保育所への就職を考えていた末富さん。幼稚園を選んだきっかけを尋ねると、「インターンシップで九州文化学園幼稚園を訪れ、幼稚園もやりがいがあると思いました。実際に現場で経験してみないと分からないこともたくさんあるので、インターンシップをしてよかったと思います」と当時を振り返ります。

現在は年少組を受け持ち、園内では「先生、見て見て～」と子どもたちの元気な声が響き渡ります。末富さんは「子どもたちから名前を呼ばれたり、『先生大好き』と言ってもらったりして、子どもたちの特別な存在になれたと感じた時はとてもうれしいですね」と笑顔で話します。

実際に働き始め、子どもたちの個性や成長のスピードの



違いを実感した末富さんは、「子どもたちの感性や『なんで?』と疑問に思う気持ちを尊重し、一緒に考えるようにしています。特に年少組は人間形成や生活習慣の基礎をつくる大切な時期なので、丁寧に教えることを心掛けています」と子どもの教育に対する思いを話します。

また、外国の子どもたちも通う同幼稚園。現在の目標について尋ねると、「子どもたちは遊びを通してコミュニケーションを取り合いますが、私はそうもいきません。子どもたちが楽しく過ごせるように、また、保護者の皆さんにもしっかりと子どもの成長を伝えられるように、英語の勉強に励んでいます」とのことでした。

子どもたちと共に自分自身も成長を

休日は友達と過ごす機会が多い末富さん。一昨年には高校時代から憧れていたYOSAKOIチーム「一喜一遊」に参加し、チームの一員としてYOSAKOI いつまいちゆう させば祭りを盛り上げるなど、プライベートの時間も充実しています。

「働き始めてから子どもや保護者と同じ視点で物事を見るようになり、学生時代よりも視野が広がりました」と自身も心境の変化を感じており、「これからも佐世保での暮らしを楽しみながら、子どもたちの成長を見守り、私自身も成長していきたいです」と笑顔で話してくれました。

(取材日 6月24日)



園児と遊ぶ末富さん



バトントワリングチームの皆さん



「一喜一遊」の衣装を着た末富さんとチームの皆さん

慣れ親しんだまちで 自身の長所を生かして働きたい

九州ひぜん信用金庫 本島支店

預金担当 磯本 梨紗 さん

佐世保商業高校(旧総合ビジネス科)を卒業後、九州ひぜん信用金庫に就職。4月からは2店舗目となる本島支店で窓口業務を勤め、新しい仕事を覚えながら笑顔でお客さんと接しています。

これまで学んだ知識を生かし、長所を生かせる仕事に

「自分の持つ力を発揮でき、長所を生かせる仕事を選びました」と話すのは、九州ひぜん信用金庫に勤める磯本さん。

子どもの頃から祖父が営む商店によく足を運び、お客さんとの会話を楽しむ祖父の姿を見て育った磯本さんは、人と話すことが大好きです。祖父の影響もあり、高校では流通の体系や起業などの流通ビジネスを学び、同時にさまざまな資格取得にも励んでいました。

高校2年生の時、「私はこれから何の仕事がしたいのだろう」と真剣に自身の将来を考えるようになった磯本さん。進路指導の先生に相談したり、先輩たちが残した就職レポートに目を通したりする中、周りの友達が進路を決めていく姿に焦りを感じていたそうです。

「慣れないまちで不安を抱えながら生活するよりも、慣れ親しんだまちで安心して生活したい」と決めていた磯本さんは、ある時、祖父が営む商店の取引先である信用金庫の存在を知り、金融業に興味を持つようになりました。一時はサービス業なども考えていた磯本さんですが、「これまで学んだ知識や資格を生かし、長所である社交性を生かせる仕事がしたい」と思い、地域とのつながりが深く、身近な存在だった同信用金庫への入社意欲が高まり、就職を目指すようになりました。

お客さまに頼られる存在に

「いらっしゃいませ」。元気な声と明るい笑顔でお客さんと接する磯本さんは、信用金庫の顔として預貯金の管理や公共料金の支払いなどの窓口業務を行っており、「働き始めてお金の大切さや金融機関の役割を改めて認識しました」と現在の心境を語ります。

本島支店に異動したのはことし4月。以前勤めていた支店のお客さんが本島支店に来店され、窓口で声を掛けられたそうで、「お客さまに顔や名前を覚えていただけるとうれしいですね。社会人になり、人と接する機会が増える中で、地元の人の温かさを実感しています」とやりがいを笑顔で話します。

モチベーションを高めるため、休日は友達とドライブに出掛けたり、おしゃれなカフェで食事をしたりして楽しんでいる磯本さん。「地元で就職したので、高校時代の友達といつでも気軽に会えるのはうれしいですね。コロナ禍で他県との往来が難しくなった今、改めて友達の存在の大きさを感じています」と地元暮らしの良さを話します。

これからの目標について尋ねると、「お客さまに頼られる人になりたいですね。まだまだ知らないことがたくさんあるので、いろいろ学び、地域の皆さんのお役に立てるように頑張ります」と意気込みを話してくれました。

(取材日 6月23日)



笑顔でお客さんと接する磯本さん



磯本さんと祖父の中島さん



友達とドライブを楽しむ磯本さん

入社5年目

強い地元愛を胸に 自分の「好き」を仕事にしたい

株式会社 九州テン

購買部 永尾 大河 さん

佐世保工業高校(電子工学科)を卒業後、株式会社九州テンに就職。現在は製品の生産に必要な部品の調達や納期の調整などを行う「購買部」に所属し、製造業の要として日々充実した毎日を送っています。

探求心からものづくりへの興味へ

「佐世保が大好きで、ずっとこのまちで暮らしたい」と力強く話すのは、九州テンに勤める永尾さん。

幼少の頃から探求心が強く、いろいろな物を手に取り、どんな仕組みになっているのかを分解したり組み立てたりして楽しんでた永尾さん。ものづくりに対する興味は年々高まり、佐世保工業高校に進学しました。高校では電気製品などに組み込まれる電子回路の基礎やテレビ・電話などの通信関係、コンピューターの仕組みなどを学ぶ一方で、部活動では毎日柔道の練習に明け暮れ、熱くて濃い青春時代を過ごしました。

以前から高校卒業後は大好きな佐世保で働きたいと考えていた永尾さん。「高校2年生の時に工場見学で同社を訪れ、直感的にこの会社で働きたいと思いました。就職先に迷いはありませんでしたが、いざ就職活動が始まると、慣れない敬語の使い方にとっても苦労しましたね。先生と何度も面接の練習を重ね、社会人としてのマナーを教えてくださいました」と当時を振り返ります。

念願の同社に就職し、現在は部品の調達や納期の調整などに励む永尾さん。「初めは購買部と聞いて驚きましたが、部品の調達は『製造業の要』であり、会社の損益に大きな影響を及ぼします。1円でも安くて良い物を必要な時期に仕入れて、会社に貢献したいですね」と意気込みを語ります。



入社5年目を迎え、職場では安心して仕事を任されるようになり、「社会人になって何事に対しても責任感が強くなりました」と自身の意識の変化を感じる永尾さん。「社会に出る前は不安でしたが、経験豊富な先輩たちに支えられ、毎日楽しく仕事をしています。これから就職される皆さんも自分のやりたいことに向かって真っすぐに突き進んでほしいですね」と後輩たちに熱いメッセージを送ります。

大好きなまちで充実した毎日を

「住むなら佐世保が一番」と断言する永尾さん。県外へ旅行に行っても、佐世保に帰ってきた時が一番安心する、そんな大好きな佐世保の魅力について尋ねると、「佐世保は気候が穏やかで、海や山に囲まれて自然も豊か、街中も程よくにぎわっていて暮らしやすい。ずっとこのまちで暮らしたいですね」と地元の魅力を話します。

特に「食」に関しては、自ら魚をさばくほど大の魚好きで、休日には市場へ足を運び、旬の魚を見て回っては店員さんから魚のさばき方やおいしい食べ方などを教わっているそうです。最後に永尾さんは「大好きなまちで好きなことをして毎日の生活を楽しんでいきたいです」と笑顔で話してくれました。

(取材日 6月29日)



会社で業務に従事する永尾さん



高校生を対象とした工場見学



魚をさばく永尾さん

入社2年目

憧れの先輩の背中を追いかけて 信頼される看護師を目指したい

地方独立行政法人 佐世保市総合医療センター

看護師 辻 ひとみ さん

清峰高校(人間コミュニケーション系列)を卒業後、佐世保市立看護専門学校に進学。現在は佐世保市総合医療センター(消化器内科)に看護師として勤務し、最先端の医療に携わりながら、患者さん一人一人に寄り添った看護をしています。

人体への興味とドクターヘリの医療スタッフに憧れて

「看護師として地元の皆さんの生活を支援したい」と話すのは、佐世保市総合医療センターに勤める辻さん。

中学時代、授業で体内の働きを学び、医療に興味を持ち始めた辻さん。同時期に校内へ駆け付けたドクターヘリやその場で働く医療スタッフに目を奪われ、看護師に憧れを抱くようになりました。一方で、農家だった祖父の影響で畜産の道にも進みたいと考えていた辻さん。どちらにも興味があり、真剣に悩んだ結果、「今しかできない仕事をしたい」と出した答えは「看護師」でした。「畜産の道ではなく看護の道に進むと決めたからには、絶対に看護師になってやる」。強い気持ちを胸に入学した看護専門学校では、勉強と実習でめまぐるしい毎日でしたが、「同期に恵まれ、とても充実した毎日でした」と当時を振り返ります。

当時は都会に憧れ、県外での就職を考えていた辻さんですが、専門学校時代に同医療センターに実習で訪れた際、指導を受けた先輩と出会ったことで、その考えは一変。先輩の働く姿に憧れ、将来一緒に働くことを目標に、同医療センターへの就職を目指すようになりました。

実習を通じてさまざまな経験を積んだ辻さんは、専門学校の戴帽式で、「未熟な私たちを温かく見守ってくれる方への感謝の気持ちを忘れずに、看護師の道を歩んでいきます」と誓いを立て、現在同医療センターで働いています。



患者さんとの信頼関係を築けるように

働き始めたある日、辻さんは専門学校時代に実習で受け持った患者さんと再会し、後日励ましのお便りをいただいたそうです。「今の私がいるのは当時の患者さんのおかげ。学生で不慣れな私を受け入れてくださった気持ちを裏切れない」という思いが強く、その思いは今の原動力にもなっています。

さまざまな事情で、毎日多くの人が入り出る医療センターでは、時に辛い場面に遭遇することも。それでも辻さんは、「患者さんの一番身近な存在だからこそ、看護師にはいろいろな力が求められます。命を守るため、患者さんに厳しく接しなくてはならない場面もありますが、お互いに信頼関係を築けた時にはやりがいを感じますね」と笑顔で話します。

日々命の最前線に立ち、疲れた辻さんの心を癒やすのは、家族からの「おかえりなさい」の一言。「家族の存在はかけがえのない大きいものですね」と地元だからこそできる良さを話します。

休日は家でヒマワリを育てたり、近くの公園で夕日を眺めたりして気持ちを高めている辻さん。「これからも患者さん一人一人に寄り添い、信頼される看護師を目指して頑張ります」と意気込みを話してくれました。

(取材日 6月25日)



血圧を測定する辻さん



看護専門学校時代の辻さんと同期の皆さん



お気に入りの「神崎鼻公園」の夕日